

Blown by Mistral

第二話

今
出
敦



何かが吹っ切れた。

小説の中で、病気になった、ひとりぼっちのロビンソンは真剣に神に祈る。

まだ、祈りを捧げる存在を持たなかった。回復には、強い意志が作用した。

助けてくれたコレットにも叱られ口論にも負けた。

真面目にカレッツジへ通う。すると、教師やクラスメートにも少しずつ興味を湧いた。

暖かい間には、生地のないキヤミソールから肉付きの良い両肩を出していた担任女教師も、長袖を羽織っている。豊かな漆黒の長い髪を束ねずに、肩から後ろに垂らしていた。

ある日の授業では、ムスタキのシャンソンを聴かせて、重要なフレーズを生徒に暗唱させた。教室で、ポータブルプレーヤーの上の回転するSPレコードを見つめる。甘い声を聴いて、窓の外は快晴なのに、〈雨が降る間に…… 私は……〉と、時制の一致を学ぶ。

クラスには、直近のイラン革命で国王と亡命した、パーレビ体制下の高官だった人物もいた。立派なカイザー髭を生やし、白髪の間じる硬そうな黒髪を撫でつけた紳士の横顔には、知識人らしい面影と諦観が隠れている。

近代までペルシャは、固有の文化と歴史を有していた。

油田がある、それだけのために欧米先進国から覇権を争奪され続けた。まずイギリス、ドイツ、そして後発のアメリカだっ

た。さらにはアメリカを手助けする当時のフランスからも、イランは遠くなかったのだろう。

欧米支援による傀儡政権を樹立するためイランへ戻った国王は、ほどなく革命によりアメリカへ亡命した。歴史の中に消えてしまった東アジアの国にもラストエンペラーはいた。

若いアイリッシュの兄妹は、九月の始業時には、

「この海はアイルランドより、ずーっと温かい。まだ十分泳げますよ！」と宣言し実践していた。

同じテイーンエイジャヤーのイギリス娘も彼らも、富裕な親に連れられた移民である。

税金の高い母国から脱出し、新天地アメリカ合衆国へ渡ろうとしていた。その受け入れビザを、彼らは家族単位で待っていた。

イデオロギーや宗教による迫害を強く受けてはいなくても、ちっとも生活困窮していなくとも、世界には、そうした経済移民もいる。

ブロイラー鶏のように、ただ生かされて窮屈なままなら、たとえ鶏だって不満だろう。生きるとは、理想や納得を追い求めていくことなのかもしれない。

親の生き方に子供は同行する。

アメリカン・ドリームは、まだ輝きを放っていた。

解禁されたボジョレ・ヌーボーを、ミッシェルと良く飲んだ。

軽く飲みやすい手軽な赤ワインは明るい色合いをしている。ワイングラスの中の赤は、透明感のあるステンンドグラスを思わせる。

カンヌには、歴史的な背景からイギリス人居住者が多い。彼らに言わせると、スイスで初めてスキーを愉しんだのも、初物としてのボジョレ・ヌーボーを競って飲みブーム化に貢献したのも、他ならぬ我々イギリス人であるとなる。

何事につけ、一番や最初が大げさに喧伝される。

第一次産業革命を起こした最初の国家の民が持つ高いプライドは、世界中から利権を収奪して潤った帝国の人々らしい傲慢さだけでも、まさしく、富の集約に民衆の文化的活動も付属するだろう。

あの島国から海外へ渡ったイギリス人たちとは気が合った。

ロジールのある駅の山側には下町を匂わせる券囲気があった。労働者たちが集まるバーを見つけて通う。カンヌで四軒目の店である。

ほとんどの常連もオナーも、ルーツはアルジェリアかチュニジアやモロッコなど北アフリカの国々から来た移民だった。地中海を渡る風のような交流の歴史を連想させられる。イギリスにも西ドイツにも、多くの異教徒や肌の色が違う人たちが出稼ぎをしに移住していた。

特に誰とも親しく話したりはしなかった。だが、いつも独り

で飲みに現れる若い極東アジア女性を彼らは嫌わない。寛容で自由だった。疎外される痛みを知る人たちは、しなやかに生きている。

不粋なテレビゲーム機が気になった。ゲームセンターにあるような独立したタイプである。テレビ番組なんぞ見ないと気取る人たちが多い国に似合わない。ブロック崩しのコンピュータゲームは、開発したアメリカ製のものだったのか、あるいは後発の日本製だったのだろうか。

ピコンピコンと電子音が店内に流れる。その有料のゲーム機は人気があり、譲り合ってプレイした。

マジエデイの友人に誘われ映画を観る。

マジエデイには、病気から回復した後も、ポルノシヨップの方へ会いに行っていた。必ず、親しみのこもった笑顔をくれる。

「観る？」と、屈託なくブルーフィルムを観せるブースの方へ頭を傾げる。興味はあった。だが、訪問の目的は、彼と英語で話すことである。「いや、いいよ」と、いつも素っ気なく遠慮した。

店内には、男性用と女性用それぞれ、性行為などに使用されるらしい道具類がおおっぴらに陳列されている。こんなものまでと眼を見張る。

人の個人的な秘め事と欲望には多様さがあった。

フリーの男性客が来店し、若い女が店員と談笑しているのが

気に障ったか、驚いて、捨て台詞を吐き逃げるように去っていった。

「ごめん。仕事の邪魔したらしい」

「気にするなよ」

マジエデイは取り合わなかった。

小さな町の割には映画館が多い。毎年五月に映画祭が開催されるからだろう。

マジエデイは一緒に行きたいが時間がないからと、代わりに親友を紹介した。

フランス国内では、公開される外国映画のほとんどがフランス語に吹き替えられて上映される。通訳が要るだろうとの優しい心遣いだった。

親友のハジもチュニジア人というが上手な英語を話した。前年の映画祭で上映されて話題となりロングラン上映されていた、アメリカ映画のミッドナイト・エクスプレスを観た。真横でハジが画面に合わせて小声で通訳する。英語とて完璧ではないがフランス語よりは慣れている。助かった。

小柄で、決して見映えのするタイプでもなかった彼も親切な性格をしている。とても紳士だった。マジエデイとは大学の同級生である。二人とも、良心的な医師になるだろうと信じられた。

優れたエンターテインメント作品が心に刻まれた。

イギリスの寄宿舎にいた頃に、神話の里であるキプロス（サ

イブラス）島の帰属を巡り、ギリシヤとトルコが、権益を持つイギリスをも交えて争っていた。その関係で、トルコ人とギリシヤ人の生徒同士は互いに口を利かなかった。

ギリシヤの軍事政権がクーデターをキプロス共和国に起こし、トルコが派兵して、島は南北に分断した。植民地に共和国を独立させて英連邦に入れた帝国イギリスは多数派のギリシヤ系住民を支持し、アメリカ合衆国も、同盟国のイギリスを支援する関係から反トルコに傾く。膨大な油田地帯を持つ中東を牽制する位置に西側の基地を保つために。

少数派のトルコ系住民を守りムスリムの誇りを示したいトルコがいる。恥をかくわけにいかない。それは死に値した。かつて、同じような意識を大切にしていた国があった。

いにしえの武士たちが持っていた美学と中東地域に於ける根底のメンタリティーには通い合う感覚がある。先に豊さに向かった欧米は気づかぬフリをする。彼らがフロンティアを得た傍らで、狩りをする自由を奪われたネイティブアメリカンたちの末裔は、狭い地区で、補償金を酒に換えて暮らす。自由な社会に組み込まれ不自由さを抱える。膝を抱えて、天を仰ぐ。

現実のパワーバランスの危うさが映画の背景には色濃く描かれている。その映画に誘われたことを感謝した。

ハジとは意気投合し、さらに、アポカリプス・ナウ（地獄の黙示録）も観た。

五月にパルム・ドールを同時受賞したというブリキの太鼓の

方は帰国してから観た。フライブルグにいる頃から教師たちが話題にしていた文学作品だった。

セックスも戦争も、人間の営みとして続けられている。衝動と感情と計算が裏にある。時には純粋さに、人は命を賭ける。

ミッシェルは、会いたくない時には居留守を使う。彼の部屋には、電話もなかった。

気の向くままに、彼のアパートメントの呼び鈴を鳴らす。その時、部屋に灯りが点いていても、たとえ窓から、そつと訪問者を確認する彼を見ても、本人が玄関まで降りてこなければ部屋には入れない。

特に用事はないので、また次回と諦めるだけだった。忙しい理由は無数にあるし、アポなしで訪ねる方にも無理がある。慢性的な財政難を抱えていた可能性も考えられた。

次に会った時に、どうしたのと話題にすることもなかった。知り合つて間がない頃に、彼の行きつけのデートしたレストランで、フランス女性をエスコートしているのを目撃している。いつもの仲間たちとテーブルを囲んでいた。

バツの悪い表情で驚く彼に、憤然と、

「イデオツ（バカ）！」と投げつけて店から飛び出した。

自分だけ前向きに真剣になっても愚かだろう。遊びなら、そのつもりでいれば気楽だった。別に、不自由はない。

しばらくして、エルビス・コストロのロックコンサートで再

会する。特設テントのような会場の出口ですれ違った。彼には男性の連れがいた。互いに気づいて声を掛け合う。

再会した場所が良かったのだろう。それで、なんとなく復活した。

所詮は日常的な会話にも戸惑う儂い関係である。いつまでもカンスに滞在しないと分かっていた。なのに一緒にいて楽しい。込み入った話は一切せずに見つめ合い、自然と、素肌を合わせ寝た。

ピアノバーのジャックと、同じくミュージシャンをしていたミッシェルは知り合いだった。狭い町である。

ジャックほどではないにせよミッシェルも、地元で少し知られた存在だった。

「俺と結婚は考えるなよ」とアンドレは警戒した。機嫌の良い時には勝手に言っていた。

「そんなこと、考えてないよ……」

ただ、かわいそうと思っっているんだとは言葉にしなかった。

カレッジのクラスメートたちとの交流も深まり、放課後が忙しくなる。英語圏からの生徒が多く共通言語が英語なのは仕方なかった。久しぶりにたくさん英会話する。

アイリッシュ兄妹のピーターとアンジェラ、イギリス娘のソフィと四人で、昼間から、ヨットハーバーに面するパブ「スワ

ン”へ出かける。日課になっていた。ミッシェルに出会った店である。

クロックムツシューやクロックマダムなど食べて、コーヒールに飽きるとビールやワインを飲み長居する。平日の昼間は空いていた。ワインだけでなく安いシャンパンやヴァン・ドゥ・ムースも、グラス単位で飲ませてくれた。

夜には、ジュークボックスから繰り返しジョニー・ホリデイやフランソワーズ・アルデイなどが流れ、労働から解放された大人たちが、ダーツや会話や出会いを愉しむ社交場と化する。

オーナーはオランダ人だった。商売が上手い。

けだるい午後の屋内での雰囲気は、その薄暗がりを通して、中退する前の、かつての高校一年生の頃の甘酸っぱさを運んでくる。

先輩や同級生たちと、放課後のみならず授業をサボり喫茶店に溜まっていた。

あの頃も、飽きずに馬鹿げた話をしては誰かが笑い転がっていた。

「アッコ、reallyって、言ってみて？」

「リアリー」

「違うよ、reallyだよ」

「うー リアリー！」

途端に、弾けたような笑いが起きる。ソバカスの多い赤毛の

アンジェラは笑い上戸だった。

日本人には、巻き舌のRと、舌を上顎の歯の裏に付けて発音するLが連続する単語は難解である。

十代という年齢を惜しむかのように彼らは、面白くて仕方ないといった調子で愛想を崩した。

ちくしよー。いつか完璧に発音してやるぞと心に誓う。

日本食レストランのサムライへ初めて入った時には、まだ支度中だった。

「すいません、まだなんです」

奥から、オーナーのショウウさんが出てきた。ジャックやクリさんに会ったと話す。出直した。

その小さな店は夜だけ営業している。天麩羅定食のワンメニューしかなかった。ラーメン店のようにシンプルだが、皿からはみ出す特大サイズの有頭車海老が二匹と豪華である。新鮮で仕上がり具合も良く文句なく甘い。米も選んでいた。店内に漂う香ばしい揚げた海老の匂いが鼻腔を刺激する。

食後のデザートとして、上等なバナナアイスクリームに台湾産の赤い殻付き冷凍ライチを添えている。少し違和感を覚える。

台湾も日本も同じ極東アジアである。人種も近い。遠くコンチネントの人々から見れば、台湾産だろうが日本産だろうが大差ないことかもしれない。工夫は認められた。

狭い店は、ダイナーの時間帯には繁盛していた。

奥の小さなキッチンで、シヨウさんは天麩羅を揚げ続ける。職人を支える若女将のような眼差しで、活き活きとサービスを担当するキャロルも忙しそうだった。

キャロルは、強い肌荒れからアバタの残る両頬を少し気にしている。その気後れする性質に内面が映る。普段は勝ち気だし、ブロンドの美人だった。少なからず意識されて、彼女がシヨウさんのパートナーと気づく。

ロージーにあるキャンティーンでも食事していた。とにかく安い。朝食はなかったが、昼も夕方も営業していた。

注文の仕方が初めは分からなかった。カウンター越しの、微塵も憂いのないシェフは頑なにフランス語しか話さない。

まずトレイ。それから、長いカウンターの端から並んでいるパンや前菜の小皿を順番に選び取る。そこまで会話は不要。だがメインは、選ばねば調理して貰えない。

もたもたしている、苛ついたシェフに怒鳴られた。思案すると怒られるのでとっさに、

「ラ、シルブプレ」と肩を竦め、ぶら下がっているホワイトボードの手書きのフランス文字から、どれかを指差す。「これ、どうぞ」だった。

「スープは？ いるのか？ いらないのか!？」とも怒鳴られた。言葉の意味が分からずただ怖くて、早く逃げたかった。

何度かトライして繰り返すうちに手順も覚えた。何が、どう

いう名称で発音されるかも理解する。

シェフも作業がスムーズになり、普通になった。「それでいいんだよ！」と人懐っこい笑顔をくれる。単純なことなんだと気楽になった。

ステーク・アツシエと言えば、ミディアムレアに焼いた牛肉だけのプレーンなハンバーグが貰えたし、コシオンやプレが、豚肉と鶏肉というのも自然に覚えた。イギリスや西ドイツでも盛んに食べられていたポテトのフライも、ごく定番の大衆料理だった。

長米の生米を茹でて生野菜とサラダにして食べる前菜が気に入る。少し芯が残るのが愛嬌である。サラダとして食べる米とというのも新鮮だったが、冷や飯は、フレンチドレッシングとの相性も良かった。さらに、フランスパンとも合っていた。

前菜のアーティチョークも見よう見真似で食べたし、アンデューブやチコリをベースにした少し苦味のあるサラダも好きだった。軽く両面を網焼きした厚みのないビーフステーキには、テーブルに置かれた酸味のあるフレンチマスタードが程良くマッチする。

キャンティーンでの食事はシンプルで質素だったけれども、総じて不味くはなかった。そこは、現実を直視する場でもある。ロージーに寄宿する自費留学生の身分が、偽りない本来の姿である。

スピードウェイへ行けば大げさな身振りのアントニオから、クワティのことを何度もからかわれた。

クワティは取り残されて泣いていた、とアントニオは正義の味方のように強調する。

「私は、翌日には駅まで彼を見送った」と諭すように言う。他に出来ることはなかったろうと思いを込めた。

常連たちとも顔見知りになり、ダイナーへ招待されるようになる。

絶品の子牛のレバーソテーをご馳走してくれた紳士がいたし、ズズは、部屋に招待した。

彼女は本屋で働いている。物静かで、年齢は近かった。

ズズは愛称で、本名はミッシェルだった。男性名のミッシェルとは綴りの最後の方が違う。女性名ではLが二つ続きEも付く。発音も多少は違っているように感じる。

カトリック国には宗教由来の名前が多い。西ドイツの状況も似ていた。

ミッシェルはドイツ圏ならミヒヤエル（ミハイル）だし英語圏ではマイケルである。大天使ミカエルは、ヤマトタケルの尊のように敬愛されていた。

ズズは、料理上手だった。

懇願されて、でも、そっちの趣味はないと強く断り、それでも構わないから来てと誘われた。

彼女のこじんまりした部屋は綺麗に片付いている。

小柄で華奢な彼女の趣味は、落ち着いた色調で眼に優しい。茶色い髪をショートにしてリスのような顔立ちをした彼女が、同化するようだった。

食前酒を勧められ、飲みながら、ズズの動きを眼で追う。

「これ、掛けようかしら」

「どうぞ」

軽めのジャズのレコードを、丁寧な仕草で彼女は鳴らす。

その挙動は意志に満ち計画的で、かつ女性的だった。熱心に、そして真剣に招待客を^{もてな}す。

良い娘だなと感心し居心地も良かった。

分かりやすいフランス語だけで話そうと努力し、英単語もいくらか交ぜたりする。

彼女が用意したワインを飲み、料理を食べて、

「美味しいね」と正直な感想を漏らす。すると目の前で、泣き出しそうなクシヤツとした笑顔ではにかむ。いじらしかった。

「男には出来ないようなことも、私は、あなたにしてあげられるわ」

「そうなの……？」

「自信あるわ。だから…… 試してみない？」

見つめられると、挫けそうになる。

「ああ、でも、ごめん！ 私はノーマルなもの。決して、女を好きにはならないわ。私は普通に男が好きタイプ。でも、あなたが可愛い女性とは分かるよ」

息苦しかった。

「……分かった。でも、私はアツコが好き！ それはオーケー？」
「構わない」

ズズの手に触れた。眼を見て、そっと、友情の抱擁をする。
詳しい事情も生い立ちも知らない。それでも、彼女の内面が抱える深い孤独に立ち入ってしまった夜には、少なからず心が揺れた。

求めるものが手に入らない辛さは、立場の違いを超えて共通だった。想いをストレートに寄せて貰えた心地よさも痛い。
ズズの笑顔を見たいと願う自分が、偽善者のように感じられた。

こういうことから、なるべく離れて生きていたい。けれど、それが可能かと問われれば、まるで自信が持てなかった。

生きていけば、好きな人に会うだろうし、違う場面では自分を好きになる人にも会うのだろう。これまでも、だいたいそうだった。それぞれの想いが交錯し、自分は、出逢いを喜んだり悩んだり、あるいは苦しんだりもして、ひとつとして楽な道を進むことはないのだろう。

恋愛の可能性は制限されない。そこは自由である。ところが感情は、どうにも不自由だった。思い通りにならない。善人なら愛せるというわけでもなかった。

同化したほど好きだと感じてても、それは幻想だった。互いに自己を守りつつ相手のためにも生きるのは不可能だろうし、

純愛を貫くには相当な覚悟と、馬鹿になることが要求される気もする。いつも、解けない宿題だった。

父が、家から追い出されることになった日々を覚えていた。小学五年生の時だった。働かずに過ごした時間が永かった彼は、母に愛想を尽かされた。仕方のない選択として、泣きながら、寂しい父親を見送った。気の抜けたサイダーのような正月が来て、匂いのしない六年生をやり過ごした。やがて母は、ますます恥じらない雌を隠さなくなっていた。

強い風に吹かれている。負けないように、薄くて軽いウインドブレーカーを着ていた。深い海のようなネイビーブルーのウインドブレーカーは、明るいオレンジ色と黄色のラインをファスナーの部分だけアクセントに走らせる。喉までピッチリとファスナーを閉じた。

豪快な風が髪もてぎの毛を弄ぶ。段カットの長めのショートヘアに、太めのロットで緩くパーマを当てウェーブさせていた。

アルプス山脈から冷たい強風がプロバンス方面へ吹く。北西の風は地中海へと走り抜ける。乾いていた。

昼間に荒れていた海は、夜には風いでくる。ミストラルは、昼間の風だった。

*

ヨットハーバーには、地中海沿岸の風景としてはありふれた、

多数の外国籍のヨットや高級クルーザーが繫留されている。スワンで知り合ったチョコに、興味があるなら内部を見せてやるよと気軽に誘われた。

夜中に、おびたらしい白いマストが聳える、ひっそりしたハーバーまで半信半疑でついで行く。小波に揺らぐディングーボートたちが会話するように、ちやぷちやふと水音をたてていた。暗がりでもチョコに手招きされ、こそつとクルーザーに忍び込んだ。ゴージャスな内装に目を見張る。随所に真鍮が嵌め込まれていた。複数の寝室とキッチンがある。さらにラウンジには、輝く木肌の重厚なバーカウンターまでが設えられていた。およそ海上を移動する、優雅な邸宅といった趣である。

そのクルーザーは資産家の所有で、若いチョコは、調理人兼雑用係として出発地のアメリカ方面で雇われた。彼は、それほど貧しいブルトリカンではなかったかもしれないが、せいぜい中流家庭ぐらゐの出身だったろう。

「ご主人たちはさ、あつちの最高級ホテルに泊まってるよ」
癖の強いアクセントの慣れた英語で種明かしする。

「つまり、あなたはこの船のお守り？　ここに寝泊まりしてるのね」

「そう。おいらは料理もする。でも、ちゃんとホテルに一人で泊まってるよ。なんか飲む？」

「いや、結構よ。長居はしたくない気分」

「気にするなよー 誰も来ないから！」

「そうかもしれないけど…… リラックスはしないじゃない」
両手を広げて苦笑いしアピールする。

「平気さ。このボートは、まだ二週間くらいはここにいるみたいだからね。クリスマスがあるだろ」

「それから、どこへ行くの？」

「んー たぶん、イタリア。じゃなきゃ、ユーゴスラビアかなあ。おいらが決めるんじゃないから……」
アンドレがユーゴスラビアへ旅したばかりだった。

たかが一杯のビールをカフェで注文したくても、知っている複数の言語からあれこれとビールを意味する単語を試し、挙げ句どれも通じなかった苦勞話を報告していた。苦笑しながら、同じヨーロッパなのにユーゴスラビアは違うと言っていた。

「そうだよ。ユーゴスラビアは素敵な処らしいけど…… ずっと一緒なのね。チョコは、楽しいの？」

「まあまあ。だって仕事じゃないか。でも、ずっと、おいらたちこの国にいるよりはさ、きつと楽しい」

「同感！」

チョコは明るい。若いから深く考えないのかもしれない。同世代で親しみが持てたし話しやすかった。

カリブ海の島の一つに生まれ、越境して、冬は寒かったりもする北アメリカ本土の街で移民のような扱いで働き続けることや、島に残り、少ない仕事をしようと苦勞してストラグルする生活などとも、クルーザーの持ち主に雇われる暮らしは比較す

れば楽かもしれない。だが故郷を離れ、家族や仲間から遠い時間を過ごすのも寂しいものだろう。

チコだけでなくスワンでは、一人で飲みに来ている男性客に誘われることも多かった。そうした目的を持ち通ったわけではなかったが、たまに人肌が恋しい夜には不自由しなかった。

そこに恋愛はないが面倒も起きない。それは幸運だった。ただけかもしれない。けれども手軽だった。

自分自身を持って余している。そろそろ、決めよう、決めなくてはならない。焦燥感に攻め立てられるようになっていた。決めるには、知っておかなければならない。

イギリス人のジョンと親しくなり、部屋へ招かれた。ジョンは、カンヌに永住している。まだ明るかった。

居間のソファアに座り、二人で静かに話していた。彼は、父親よりも歳が離れている。何かが起きようなど考えなかった。

キスをされ、警戒心が解かれる。着衣のまま抱き合った。

初老の男は無理をせず、ただ、右足の太ももを若い女の股に密着させると、小刻みな振動を繰り返し与える。無言だった。

公園の遊具にまたがるような、軽いリズムカルな振動に呼吸する心地よさを覚える。

段階的な山と谷を繰り返し間断なく訪れる親切的な振動から、異質な人間同士であった男女に共通して現れるかもしれないスパークのような、生の煌めきを待った。

目の前に老醜が迫る。彼の顔に刻まれた深い皺やシミを見つめて、長い吐息を押し殺した。

そうだ。老いは平等に訪れる。気にしていなかった。彼はもはや、穏やかな最期を夢見て生きているのだろう。

虚しい。こんなことはしてはならない。

孤独を抱く若い女は、乾いたオーガズムに達する。静かな行為は終わった。

ジョンは、肩で息をしながら仰向けに寝転び、しばらくして、嬉しそうにクッククツと声を立てて笑った。

照れて、彼を殴る真似をする。

ジョンと知り合ったことにより、在留するイギリス人たちのコミュニティにも近づいた。スワンでの顔見知りも少なくな。顔役のジョンのような独身者だけでなく家族で暮らす人々もいた。中には、大邸宅を構える成功者も含まれた。

短期滞在のビザが切れそうになった。イタリア国境まで行き、出国と入国を繰り返す。ついでに、プロバンスの小さな村に寄る。ジョアン・レ・パンとアンティープに途中下車した。

アンティープには、近郊に晩年のピカソが居住し、その作品群を展示した小さな美術館がある。旧市街の古城に、彼はアトリエを構えていた。そこからは、地平線まで続く空と紺碧の海だけが鮮やかに見渡せる。バルセロナにある大きな美術館の方とはコンセプトが違った。今にも、巨匠の息遣いが聞こえるよ

うである。

パブロ・ピカソが、人生の最終章に抱いた感覚や意志を伝えられた。

彼は二度目の結婚をして幸せだったのだろう。溢れる感情を込めるような温もりある絵画や習作デッサン、楽しんでいたという陶芸の小品が展示されていた。

平和と、愛と、安心や喜びに満ちている。

サムライへ顔を出すと、たまに、コンちゃんやフチガミさんにも会えた。食事はしないで、閉店の片付けをするショウさんとお喋りを楽しむ。同じ目的で現れる二人のコックたちは、はるばる海を渡り、フレンチの修行をしていた。高級レストランがあることでも名高い郊外のムージャンで働いている。

コンちゃんは真面目な好青年で、フチガミさんはお酒が大好きだった。口下手なのに、酔うと必ず、世界中の国名を織り込んだ替え歌を大声で披露した。太い眉毛が印象的な気のいいオジサンだった。

ショウさんは、三十代前半くらいで単身赴任していた。かなり永く日本を離れているようである。

どちらかと言うと接客に向くタイプには見えない。無口ではないが、どこか眼が怖い。何かを隠して生きているようにも見えた。あるいはスパイとか、忍者みたいな…… まさか。

「あっちゃん、良かったらうち来ないか？ 飲もうよ」

誘われて、一度だけ彼の部屋に入った。キャロルは閉店前に帰っている。

青いファイアットの二人乗りスポーツカーを飛ばす。スピードに慣れた運転だった。

単身者の飾り気ないマンションに着いた。そこで聞いた話を忘れることはないだろう。

およそ十年以上も前に彼は、小型のヨットで、大島から独りきりで日本を脱出した。まずスペインに滞在して、それからフランスに移り空手を教える。

ジスカールデスタン現職大統領のボディガードも務めた。「ほら」と渡された包みには本物の拳銃が、無造作にしまわれている。ずしりと重い。

「護身用だよ。俺はライセンスを持つてるんだ。日本人じゃフランスでは俺だけだろう。だから持てるんだよ」

催眠術のように静かに、眼の奥を射ぬくように話す。小さな両眼から、見えない光が射すようだった。

「日本には帰らないんですか？」

「今は、まだ帰らない」
キツパリしていた。

東京の新宿の繁華街で育ち、幼なじみには、有名な美人女優がいると打ち明ける。

「泣きべそかきでさ、しょっちゅう泣かせてた。あんなに有名になるとは思わなかったな。アツハツハ！」

話の面白い人である。頭の回転が速い。だが、明るく話していても、どこかに影があった。

とりとめのない会話の中で、ふと、子猫を処分する彼の残酷性が際立つ。

「押しつけられた猫がいてさ、子供を産んじやって……」

「まあ、大変。それで、どうしたんですか？」

動物好きには心が動く話題だった。ところが……

「いや、生まれたての子猫なんて簡単だよ。まだ目も開いてない。トイレにね、一匹ずつ流すのよ。シュツてね。五匹いたな。

五回、シュツ。簡単でしょ」

ジェスチャーも交えて、さも明るい話題のように悪びれず話す。

「なんてことを！ ……、ひどい!!」

こちらの反応を伺う眼を意識した。その場はしのいだが、この人物には、決して深入りしてはならないと悟る。

そうした雰囲気伝わったからかどうかは不明だったが、彼から求められはしなかった。

アンドレの話をする、

「こっちではさ、外地の生まれは蔑まれて差別されるのよ。ピエノワって知ってる？ 黒い足って意味さ」

あ！ と思った。そうだったのか、アンドレ。

シヨウさんの人物像について、似たような印象を持つ二人と

も話していた。

そつと内緒話をするように、

「あの人は、俺は、三億円犯人じゃないかと思うよ」と、フチガミさんは真剣な表情をする。

「そうそう！ あのモニタージュ写真なんかさあ、似てない？ 歳格好だって、合ってるだろ」

「確かに。可能性ありますよね。だって、一度も帰らないんですよ？」

思わず、コンちゃんに同調した。

酒の席での話題だった。たとえシヨウさんに隠したい過去があつたとしても、それをほじくり出す気など誰にもないのである。とりあえず被害もない。

単純に、未解決の重大事件の真相を自分たちが暴いたなら面白いというだけだった。そんな特別な人物ではなくても彼は、脱税くらいはしているだろうと話は落ち着いていた。

しばらくして、金曜の晩だけでいいから店を手伝ってくれないかとシヨウさんは言った。キャロルに用事があるらしい。

「いいよ」

快諾した。

ロンドンでもフライブルグでもアルバイトした。

カンヌでも、やることになった。

続く(第一話終了)